



## 自転車との再会

北村茂範

旅先でレンタサイクルを借りた。車が生活必需品の地域で就職してからは、めっきり自転車から遠ざかっていた。幼い頃から日々の足として使ってきたけれど、車がその役割を担うようになった。歩くよりは早いけれど車にはかなわないし、なにより疲れる。天候にも左右される中途半端な乗り物。自転車に乗るのは学生まで、車を持てば卒業するもの。そう思っていた。

借りた自転車はクロスバイクだった。シティサイクルではなかったのは単なる偶然。他が出払っていたからだ。高めの値付けに舌打ちしつつ、漕ぎ出した。それは、自分が知っている自転車とは別の乗り物だった。どこまでも滑っていく感覚。軽い漕ぎ味。自分の力が素直にペダルに伝わり、自転車はそれに応えて進んでいく。

軽快。自転車ってこんな楽しい乗り物だったのか！これまで乗ってきた自転車の感覚よりも、前に進むのだ。なんだか得した気分で、その差分が脳にとっては快感だった。これが乗っているかぎり続くのだ。この日を境に自転車への思いは憧れへと転じた。

懐に余裕が出来たから、自転車を手に入れた。もちろんクロスバイク。2シーズン前の売れ残りだから安かった。在庫品なのに運良くサイズが身体に合った。鍵もついてないし、カゴや泥除けもない。これまで持っていた自転車像からすれ

ば、この手の自転車は実用性を無視しているように思える。恰好重視の姿勢に若干疑問を感じたが、結果的には追加した泥除けも外してしまったし、カゴなんかなくても通勤やスーパーへの買い物にも支障はなかった。

納車後、一つ先の駅まで行ってみた。あっさり着いた。さらにもうひとつ先の駅まで行ってみた。なんともない！次々と距離を伸ばす。気に入ったのは、昔からある道。最近できた道と違い、まっすぐ作られていないそれは、右に左にゆらゆら揺らぐ。先が見通せないから探究心も刺激する。堤防道路もすばらしい。道が川の流れにそってゆらいでいる。ゆらぎは癒やしだ。癒されながら距離を重ねる。

「自転車で隣県まで走った」といったエピソードは、体力に自信のある人の特殊なチャレンジだと理解していた。でも、違っていた。自分は謎ルールに支配されていたのだ。自転車の行動範囲は5～6km、時間にして20～30分程度という思い込み。「親や学校の許可なく校区外に出てはダメ」。かつての生徒指導が、意識の下に潜んだまとなっていたのだろうか？

今振り返れば、借りたあのクロスバイクは入門クラスの自転車だったことが分かる。しかし、それで十分。多くの人は、自転車の本当のポテンシャルを知らないように思う。自転車で県境を越える話を聞いて驚いていたかつての自分も。一度体験すればその実力を知るはずだ。ぜひ多くの人に知ってほしいと願う。きっと虜になるはずだ。